

かかえての中央病院という性格の中で、京都の病院、それも近隣に大学病院があつた環境で考えてみたときの考察は如何にすすめていったらよいでしょうか。

(2) 発足時から今日の統計的観察は、明日の県立中央病院の一科としてのあり方や拡充計画など一つの基礎資料となり得ましょう。むしろそこに今回のご発表の目標もあるのではないですか。

この(1)、(2)をとおして今後の一科の手術、そのための入院という患者行動についての思考がもたらこんなよいことはありません。

質 問：黒田 政文 三沢市開業（口腔病理）

1. 開業医としては、患者の流れに可成りの関心があるのですが。

ご発表によりますと、院内紹介が約50%近いとようですので、患者来院時（初診）の診療科目の認識がたりないのではないのでしょうか。

また、例えば、内科、外科等の外来から転科するものも多いのは歯科口腔内疾患が内科的、外科的な所見が併発または原発のためでしょうか。

2. 市内歯科医院よりの紹介が少ないのはどのように考えられますか。

回 答：演 者

1) 始めのうちは口腔外科の疾患の認識不足から他科を受診するケースが多かったが、受付に看護婦を置き口腔領域の疾患の場合には来科させるように指導したところ、最近では直接来科する症例が多くなっている。

2) 開業医からの紹介は少なく、むしろ院内や他の県立病院からの紹介が多い。開業医に対してもPRが必要と考える。

演題8 岩手医科大学歯学部第2口腔外科の最近3年間に於ける入院患者の臨床統計的観察

○沼田 与志晴, 小川 光一, 佐々木 正道,
佐藤 憲太郎, 松本 断, 関 重道,
関山 三郎

岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座

今回われわれは、昭和50年4月1日より、昭和53年3月31日までの3年間に岩手医科大学歯学部第2口腔外科に入院加療を要した患者476名について、統計的観察を行なったのでその概要を報告した。

年度別推移は、50年度が最も多く、1年間平均入院

患者数は158.7名であった。月別では、ほぼ一定で、1カ月平均13.2名であった。年齢別では、30歳代が最も多く、性別では、男264例、女212例で男性が女性をやや上廻っていた。診断別では、炎症110例が最も多く、嚢胞85例、腫瘍71例、奇形67例、外傷65例の順であった。1症例平均入院日数は39.5日間であった。炎症は、非特異性炎、歯性感染が多く、嚢胞は、術後性上顎嚢胞が半数以上を占め、良性腫瘍は、血管腫、悪性腫瘍は、上顎癌、奇形は、唇顎口蓋裂、外傷は、下顎骨々折が各々多かった。患者は、県内外いたるところより来科入院しており、歯科医院からの紹介が多かった。他科への依頼・兼科数は、241回にもおよんでいた。また地域社会、医学部との関係密着化、浸透化が進んでいることがわかった。転帰は、ほとんど軽快退院したが、死亡は12例で、これはすべて悪性腫瘍であり、剖検率58.3%であった。

質 問：甘利 英一（小児歯科）

年度が進むにつれて、入院患者数が減少して来ているが、この点どの様に考えているか？

全国的にみてここ2、3年住民の医師はなれが生じている。かかる現象の一端かと思われるが。

回 答：演 者

外来新患数は年度が進むにつれ増加していることから、1つには、社会における口腔衛生状態が改善されてきている結果ではないかと思う。一方では、悪性腫瘍患者が増加し長期間病床を使用するため、病床の回転が悪くなりかえって入院待機患者が多くなっている現状である。

質 問：高宮 達治（歯科薬局）

1. 抜歯における薬物アレルギーが見られたとのことですが、薬物アレルギーを起した薬剤は何か。

2. なお、投与中止例がなされた薬剤は何か。

回 答：演 者

キシロカイン、ペニシリン系抗生剤などでしたが、今回は統計的に観察したので詳細な内容については充分調べていない。

質 問：石川 富士郎（矯正歯科）

前演題とも関連して同じような考え方もできるのですが、とくに大学病院という、或いは本学部のおかれた環境下で、入院ということはその前提には手術や治療行動が種々考えられるわけです。従って入院そのものに人為的なコントロールが生じているのではないのでしょうか。

（例えば、卒業研修のための入院とか、研究教育用として一つの症候群なり、疾患群に対して積極的に入

院せしめているとか)

回 答：関 山 三 郎 (第2口外)

人為的なコントロールは全くしていない。疾病の治療にあたって入院を要する患者のみを対象としている。

追 加：石 川 富 士 郎 (矯正歯科)

同じ歯学部のととの差異は如何でしょうか。第一口腔外科でも以前まとめられておられたと思います。いずれにしても統計的観察のまとめ方(とくに考察のしかた)については発表者のいろいろの意図によって違ってくるでありましょう。この集大成をもとに今後の貴科のご発展を祈ります。

座長 工 藤 啓 吾

演題9 岩手医科大学歯学部第2口腔外科の最近3年間における入院患者の手術症例の臨床統計的観察

○小野寺 満, 佐々木 哲正, 島田 隆夫,
土田 秀三, 越前 和俊, 小守林 尚之,
関 山 三 郎

岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座

昭和50年4月1日から53年3月31日までの3年間に岩手医科大学歯学部第2口腔外科を受診入院した患者の手術症例329例について統計的観察を行なった。年度別では、昭和50年度112例、51年度123例、52年度94例で、年齢別では5歳未満59例(17.9%)、30歳代51例(15.5%)、40歳代47例(14.4%)、20歳代41例(12.4%)であり性別では男性196例(59.6%)女性133例(40.4%)であった。疾患別の手術症例は、嚢胞88例(26.7%)悪性腫瘍61例(18.5%)奇形59例(17.9%)外傷38例(11.5%)良性腫瘍33例(10.0%)炎症16例(4.9%)などであった。

嚢胞手術症例では、顎骨嚢胞85例、軟組織嚢胞3例であり、年齢は20~40歳代が80%弱をしめていた。手術時間では1時間~1時間半前後、出血量は200ml~400mlであった。

悪性腫瘍では①顎骨離断による腫瘍切除術10例、②同じく切除+頸部廓清術7例、③頸部廓清術6例、カンジュレーション17例、部分切除+開洞術9例で、年齢では50歳以上に多く、手術時間は①で2~3時間、②で5~6時間、③で約3時間であり、出血量は①は

1,000ml未満、②は約2,000ml、③は約1,000mlであった。

奇形手術症例は口唇形成術25例、口蓋形成術24例で、年齢は口唇形成術1歳未満、口蓋形成術2歳未満にほとんどが行なわれ出血量は口唇形成術50ml未満、口蓋形成術200ml前後であった。

外傷手術症例では観血的整復術31例、シーネ除去4例、骨片除去3例で、年齢は20~30歳代と5歳未満に多く、手術時間は観血的整復術で3時間以内、出血量は500ml以内であった。

良性腫瘍手術症例では、顎骨腫瘍摘出術+顎骨切除術13例、軟組織腫瘍摘出術12例で、年齢は20歳以内と40歳以上に多く、手術時間は、3時間以内で、出血量は400ml以内が多かった。

全麻下での抜歯例は8例であった。時間外手術は急患、術後出血など4例であった。

麻酔の種類では、全麻例263例(80%)局麻例66例(20%)であった。全麻における挿管法は、経口例212例、経鼻例44例、経気管例7例であった。

質 問：甘 利 英 一 (小児歯科)

Handicappedのある患者の全身麻酔下の診療が少ないが、今後、口腔外科領域だけでなく、保存領域の処置のための全身麻酔を考えられてはどうか。

回 答：関 山 三 郎 (第2口外)

現在の病床数および看護状況からはその多数を受け入れることは困難である。外来での全身麻酔が可能となるように努力したい。

質 問：小 川 邦 明 (県立中央病院歯科口腔外科)

1. 出血量についてお聞きますが operator の経験年数は variety に富んでいるのかどうか。

2. 他の論文と比較して出血量の程度はどうか。

回 答：関 山 三 郎 (第2口外)

1. 術者は少人数に限定されており、技術的には差はないと考えて良い。

2. 各術式ごとの出血量についての報告はないようである。しかし、これまでにたざざわってきた手術経験からみると全体的に少ない方なのではないかと思う。

質 問：大 屋 高 徳 (第1口外)

Cryo Surgery の5例はどのように疾患に対し使用したか。

回 答：越 前 和 俊 (第2口外)

1. 今回、われわれが施行しました凍結療法は、すべて悪性腫瘍に対して行なわれたもので特に、上